

NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

- 巻頭エッセイ パスをつなぐ 1
- 教育時事 「使えない」打破へ 1
- 「英語の教え方教室」勉強会報告 2
 - ・ 第 24 回勉強会、第 25 回勉強会 2

- ・ 第 26 回勉強会・第 27 回勉強会 3
- 授業の玉手箱 「対義的な諺の活用」 4
- 書籍紹介 『I am Malala: The Girl Who Stood Up for Education and Was Shot by the Taliban』 4
- 教員免許状更新講習 3 案内 4

巻頭エッセイ パスをつなぐ

夫 明美

カレンダー上では 2013 年が大詰めを迎えますが、学年暦では 2013 年後の 3/4 を終えようとしています。したがって、年度を締めくくるには少し気が早いかもしれませんが、拙稿を今年度振り返りの機会にさせて頂きたいと思います。

2013 年は本学に着任以来、学外での研究・教育活動関連で「外に出て」、「外部の方々とかかわり」を持つ多くのチャンスに恵まれた 1 年でした。ハワイ語保持活動に取り組む学校での授業見学、先生とのインタビューについては本センターホームページ内での拙稿に報告したとおりですが、別の機会でも、日系ハワイ移民に関する番組作成者にお会いしたり、山口県周防大島にある日本ハワイ移民資料館を訪問して、施設見学・資料収集や貴重なお話をうかがう機会を得ました。

詳しい内容については今後の原稿での報告に譲りますが、いずれの方々ともお話しさせていただきながら感じたことは、「今、私が見せていただいているもの、聞かせていただいていること」を担当授業を中心にして「どうやったらより良い形で学生たちへ伝えていくことができるか」ということでした。

いろんな機関や個人の協力を得て手元を集めることができた資料をボールに例えるならば、資料提供や資料使用を許可くださった方々は、私にパスを送ってくださったのだと思います。パスを受けることができた私は、次の受け手によりパスをつなぐ責任が生じたといえます。相手が受けやすい位置に、受けやすいタイミングでパスを送れるか？ひょっとしたら一回の試みでは成功することはないかも知れませんが、はじめに私にパスをつないでくださった送り手ともやりとりしながら、粘り強く、より良い方策を考えて実行しなくては、と気を引き締めています。それと同時に、私が今後もパスを送ってもらえるに値するように、視野を広くもち、対象へ適切にアプローチしていく姿勢を維持、向上させていきたいと思いました。

第 28 回「英語の教え方教室」勉強会(案内)

平成 26 年 2 月 1 日(土) 14:00 ~ 17:00

- 「私の授業への挑戦」～英語Ⅱでいかに言語活動を取り入れていくか～
滋賀県立虎姫高等学校 小財 久美 教諭
- 「授業のつかみ」～集中力を増すウォーミングアップ・アクティビティ～
大阪女学院高等学校 李 由紀子 講師

滋賀県の新進気鋭の小財先生と大阪女学院高校の元気ハツラツの李先生に実践指導紹介をお願いしました。小財先生には言語活動をいかに取り入れるかをテーマに英語授業での実践活動を、李先生には「つかみ」活動で学ぶ意欲を高めて主学習へと展開する授業実践についてお話いただきます。



教育時事

中井 弘一

「使えない」打破へ 小学校英語の教科化・中学英語、英語で授業

下村文部科学大臣が昨年、小学校の英語を正式な教科にするという英語教育の大方針を表明した。文科相は記者の質問に答えて「現時点でまだはっきりと固めているわけではない」としながらも、同省の計画では 2020 年度から歌や遊びを通じて英語に親しむ「外国語活動」を現行の小学 5、6 年生から小 3、4 年に前倒し、小 5、6 年は英語を正式教科として週 3 コマ程度、今の中学のように教科書や専科教員らによる指導をする。さらに中学は、今の高校のように原則として英語で授業をし、高校は討論や発表などの実践力を重視する考えであると発表した。小学 5、6 年で週 2 コマ増えると平日授業が全て 6 コマとなるため、英語の 1 コマ分は始業前などに分割する案を検討しているようだが、性急すぎると思われる動きである。現在の小学校の外国語活動に関しても、未だに賛否両論がある。

小学校の外国語活動の是非

メリット

- ・ 吸収力の早い幼少期から英語に触れ、早くから英語に慣れる
- ・ 英語に対する抵抗感を無くすることができる
- ・ 英語に興味を持ち簡単な挨拶ができる
- ・ 早期の開始により英語能力の向上、発音・リスニングが向上する
- ・ 外国人に対する抵抗感が無くなる
- ・ グローバル化の動きに対応した教育：国際理解に寄与する
- ・ 児童の柔軟さを活かした教育：日常的な単語はすぐに覚える
- ・ 保護者のニーズに応えられる（文部科学省のアンケートでは、67%の保護者が賛成）

デメリット

- ・ 論理的思考、自己の確立、外国語の習得には母語の習得が大事
- ・ 英語の「あいさつ」「ゲーム」「歌やチャンツ」などの音声活動をしているだけで英語力はアップしない。英語教育ではない
- ・ 英語の強制化による英語嫌いの増加：不安や戸惑いがある
- ・ 日本語が不十分なのに、このままでは日本文化の衰退、国語力が低下する
- ・ 教員の質に問題：教えられる教員が不足している。今の 40 万人の教員でどれだけ効果的な教育ができるのか？

これらは教科でなく外国語活動への賛否両論である。これが教科になるのである。高校英語で求められるディベートの手法で考えると、importance, impact, effect がどのようなものかをまず判断する。そして、その政策に対しどのような value があるのか、たとえば、教育の重要性として 10 年後のグローバル社会を見据えたものであるべき／思考力の育成が優先で国語力の強化こそが日本が国際化社会で生きる道、などと検討する基盤の考え方を定めることが重要になる。これに priority, practicability などを縦軸にさらに検討することが必要である。practicability としては教員の質と量の確保が大きな課題となる。文科省は、中学英語免許を持つ教員や外部人材による指導を見込んでいる。また、中高教員には「英検準 1 級以上」の能力を確保するため、外部検定試験で定期的に検証し、レベル以上の教員が何割いるのか公表するとしている。英語科の教員だけがいつも能力チェックを受けることになる。今の英語教育の流れはこれでいいのだろうか。